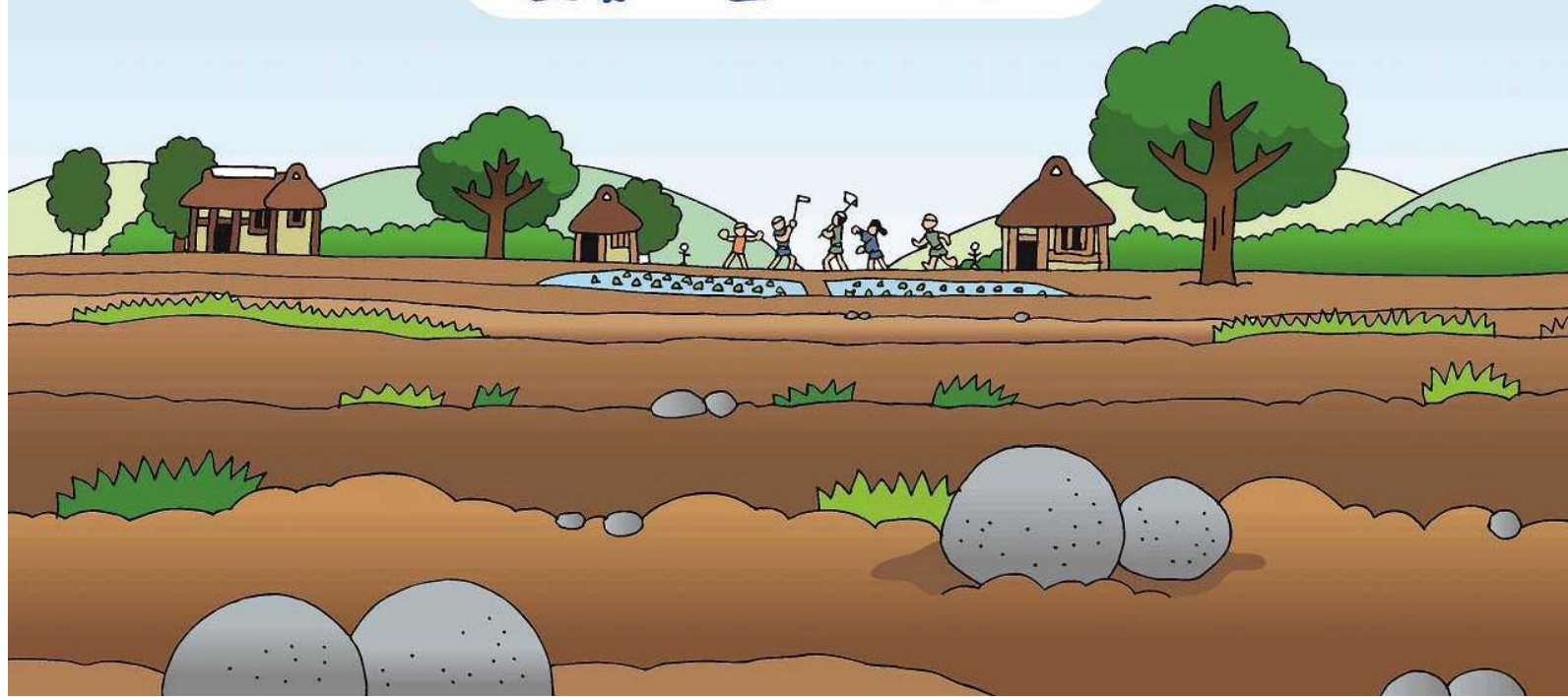


甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで

甚六の用水路

鹿妻穴堰ができるまで



【ナレーション】

むかしむかし、盛岡や紫波地方の北上川西岸は、平らでとても広い大きな土地でした。

しかし、北上川よりも十メートルも高いところにあつたため、水を流すことができませんでした。

そのため土はかたく乾き、荒れはてた土地でした。

水が少ないので、田んぼも少ししかできません。

お米がとれないため住む人もあまりいない貧しい村でした。

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【村人A】
「おらの田んぼにも水をよこせ！」

【村人B】
「だめだ、だめだ！おらのイネが育たなくなる。
水はおらの田んぼが先だ！」

【ナレーション】
貧しい村では、田んぼに引く水をめぐって村びとたちのケンカがたえませんでした。

そのため、小さな村なのに、住んでいる人たちの仲はとても悪く、いつも相手の悪口ばかりを言うしまつです。

村人は口癖のようにいつもこう言うのでした。

【村人C】
「あ～あ、もっと水があればな～。
そうすれば、田んぼがもっと作れて、米もとれて、腹いっぱい
オマンマが食べれるのになあ～」

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【ナレーション】

そのころ三戸(さんのへ)にいた南部の殿様は盛岡に新しい城をつくりたいと考えていました。

しかし、それには、家来や町の人々のためにたくさんの食料をすぐ手に入れなければいけませんでした。

悩んだ殿様は北上川西岸の村の土地を見て言いました。

【殿様】

「この広い荒れた土地を、全部田んぼにすれば、たくさんの家来や町の人々の食料を作れるな。」

【ナレーション】

そこで殿様は、一番もの知りの家来に聞きました。

【殿様】

「あの荒れた村に水を引いて田んぼをたくさん作りたい。誰かその仕事のできる人間はおらぬか？」

【家来】

「そうですね、それでは金を掘る職人で有名な甚六という者がおいます。

その男を呼んでみましょう。」

【ナレーション】

もの知りの家来はこう言いました。

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【ナレーション】
さっそく下閉伊郡(しもへいぐん)に住む鎌津田(かまつだ)甚六が、殿様のお城に呼ばれました。

【殿様】
「甚六、おめしは金を掘る職人らしいが、その土木工事のウテを活かして、この荒れた地に水を流す用水路を作れぬか？
食料と道具は用意したぞ。」

【甚六】
「おそれながら、水を引くには川が必要です。
どこの川から引けばよろしいですか？」

【殿様】
「北に大きな栗石川がある。
あそこはどうだ？」

【甚六】
「あ、あの、あばれ川ですか？」

【ナレーション】
しばらく考えて甚六は言いました。

【甚六】
「申し訳ありません、何日か調べさせてください。」

【ナレーション】
そして甚六は村と川を調査することにしたのです。

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【ナレーション】
甚六の言うとおり、そのころの栗石川は洪水がおこいやすく、流れの強い「あばれ川」で有名でした。

【甚六】
「あの恐ろしい川から水を引くのは無理だ…」

【ナレーション】
甚六はそう考えました。

しかし、村を調べに行った時、その荒れた土地で小さな田んぼに水を引くために大ゲンカしているやせた村人たちを見たのでした。

【甚六】
「まてまて、いつもこんなにケンカをしているのか？」

【村人A】
「そうさ、ここには水が少ししかこないからな！
田んぼに水を入れなきゃ米がとれねえ！」

【村人B】
「こんな小さな田んぼだって、俺たちにとっちゃ大切な田んぼなんだ。
うちにはハラをすかした子供たちがいるんだ、ちょっとでも米をとらねえと生きていけねえんだ。」

【村人C】
「もっと水が流れてくれればいいが、そんなことは無理だ。」

【ナレーション】
やせた村人たちはそう言いました。

【甚六】
「よし！わかった。俺がなんとかする。
ケンカはやめろ！」

【ナレーション】
甚六はもう一度考えてみることにしました。

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【甚六】
「俺が村人たちを助ける。」

【ナレーション】
そう心に決め、甚六はもう一度栗石川を見にまわりました。
そして何日も何日もあばれ川を見ているうちに、ついにある
場所を見つけたのです。

【甚六】
「ここだ！ここしかない！」

【ナレーション】
そこは川から突き出た剣長根(つるながね)の岩山でした。

【甚六】
「ここだけはいつも流れが変わらないし、岩山が突き出ている
からここに穴を掘れば水を取り入れやすい。
それに岩に掘った穴なら丈夫で壊れにくいだろう！」

【ナレーション】
甚六はさっそく殿様をお願いをし、道具と食料を借り、工事
にとりかかることにしました。

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【村民A】
「田んぼが作れるなら、よろこんで協力するぜ！」

【ナレーション】
村人たちの協力をもらい、甚六は岩山を掘る工事に取り掛かりました。

仲の悪かった村人も、水を引くために仲なおいをし、一致団結して工事を進めました。

しかし、何日も何日も岩を砕く工事をしましたが、なかなか思うように進みません。

【甚六】
「どうしたんだ、全然進んでいないじゃないか？」

【村民B】
「甚六さん、岩のしんがとってもかたくて大変だ。
この岩山を貫通させるには、何年もかかりそうだよ。」

【甚六】
「ん～それは困った・・・
殿様からかいた食料も道具も何年ももたないぞ・・・
なんとかしないとイケない。
岩を砕きやすくする方法はないだろうか・・・」

【ナレーション】
甚六は悩みました。

【甚六】
「どうしたらいいんだ。どうしたらいいんだ。」

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【甚六】
「そうだ！」

【ナレーション】
甚六はひらめきました。

【甚六】
「むかし親方に教えてもらった方法をとろう！」

【ナレーション】
甚六は村人と近くの山に入り、木を切りました。
そしてたくさんのたき木を作らせたのです。

【甚六】
「よし、みんなこいつを岩山に持って行って燃やすんだ！」

【ナレーション】
村人はポカンとしていましたが、言うとおりにし、岩山で燃やしました。

するとどうでしょう、岩山はあたためられてもろくない、火を消してから工事を始めると、うそのように砕きやすくなったのです。

【村人A】
「さすが、職人の甚六だ！」

【ナレーション】
村人たちは口ぐちにそう叫びました。
工事はどんどん進みました。

【村人B】
「この穴が通れば、米がたくさん作れるぞ！」

【ナレーション】
村人たちは元気いっぱいです！

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【ナレーション】

ところが、ある日大雨が降りました。
すると、あばれ川は水かさが増え、せっかく掘った穴に川の水がたくさん流れこみ、甚六たちの道具は全部流されてしまいました。

村人たちはあぜんとしてこう言いました。

【村人A】

「せっかく掘ったのに、もうダメだ・・・」

【村人B】

「やっぱり無理だったんだよ、村に水を通すなんて」

【村人C】

「甚六さん、もうやめようよ」

【ナレーション】

甚六は顔を真っ赤にして言いました。

【甚六】

「みんな元気を出せ！
水が入ったって事は水路の入口として正しいことの証明だ！
道具は俺が殿様にたのんでもう一度用意する！
村に水を引いて田んぼを作るんだろう！
ここでやめて、また荒れた土地で小さな田んぼに水を引くためにケンカをするのか？
もうひといきだガンバシ!!」

【ナレーション】

甚六に言われて村人たちは、もう一度元気を出したのです。

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【ナレーション】

甚六はもう一度、殿様にお願いし道具をそろえました。

道具は、岩を砕く「つるはし」や「げんのう」、砕いた砂利を集める「じゃりしゃくし」、そして石を運ぶ「もっこ」です。

村人たちは、岩をくだく者、石を集める者、運ぶ者、とそれぞれに役割を分担し、毎日毎日、一生懸命に働いたのです。

その後も、大雨の度に工事を中止したり、やり直したいしなければなりませんでしたが、もう村人たちは弱音を吐きません。

【村人A】

「もうすぐ村に水が通る。

そうすれば、いっぱい米が作れるぞ！」

【ナレーション】

村人たちの作業にも力が入ります。

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【ナレーション】
そして、ついに岩山は開通したのです。

【村人A・B】
「やったー！やったー！
ついにやったぞー」

【ナレーション】
雫石川の水は村人たちのあけた穴を通り、村の荒地の方へ流れて、乾いた土を潤していきました。
工事を開始してから、実に二年あまりの月日が経っていました。

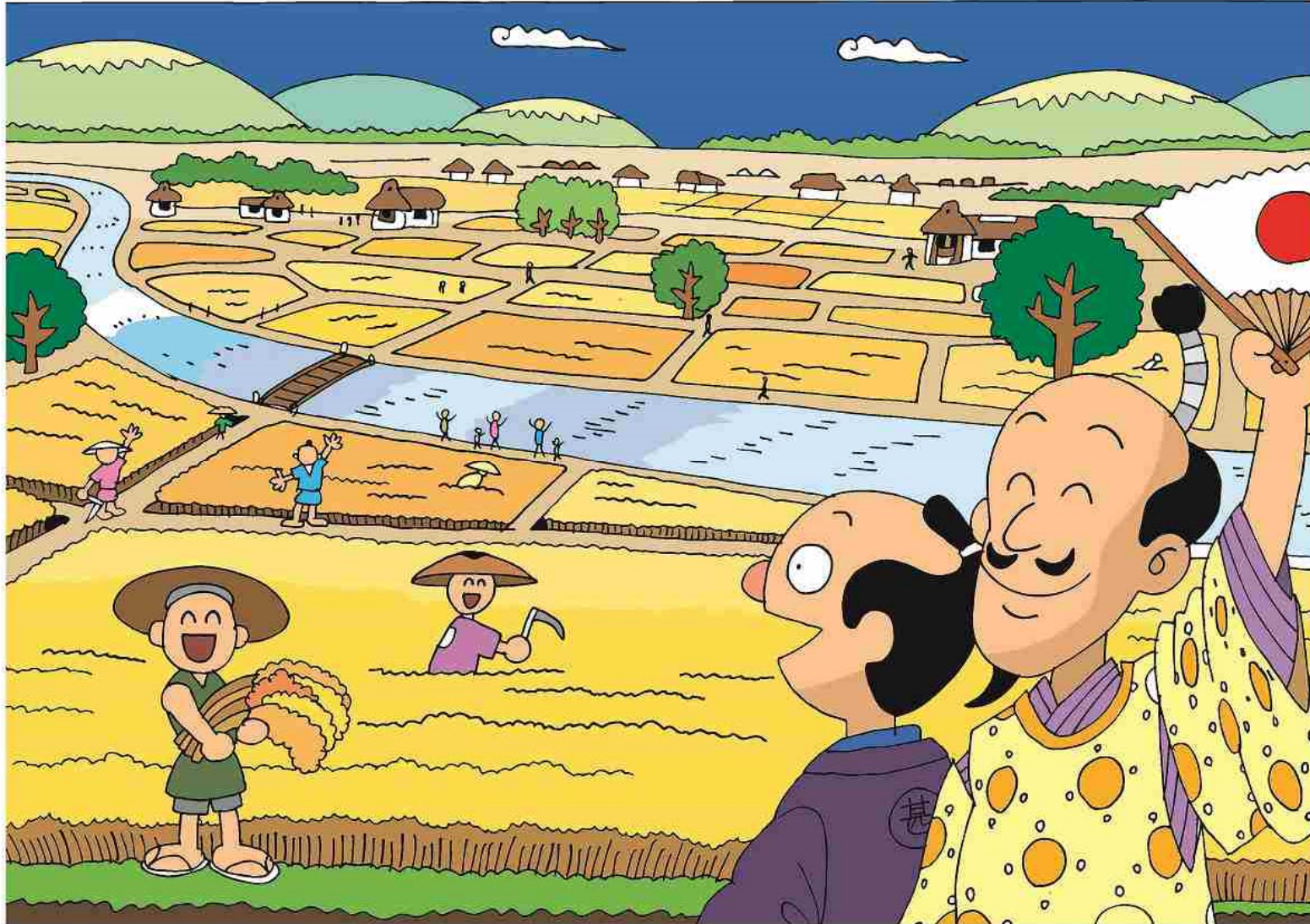
【村人A】
「甚六さん、あんたのおかげだ！
ありがとう！」

【ナレーション】
村人は口々にそう叫びました。

【甚六】
「ちがうよ！みんなが頑張ってくれたのおかげだ！
こちらこそお礼を言わせてくれ。
ありがとう」

【ナレーション】
村人と甚六は抱き合って喜びました。

甚六の用水路 鹿妻穴堰ができるまで



【ナレーション】

こうして、北上川西岸の荒れた土地は次々と田んぼに変わり、村人たちはお米をたくさん作ることができるようになりました。

その後も、水路を大きくする工事が何度か行われましたが、今の土木技術で考えても、甚六の掘った穴口の場所是最適であることがわかりました。

四〇〇年も前に見抜いた甚六はとても素晴らしい技術者だったのです。

現在は大きくなった水路から、五千ヘクタールもの田んぼに水が送られるようになり、水路一帯の土地は県内有数の穀倉地帯になりました。

人々は今でも、暮らしを豊かにしてくれた甚六を大いに慕い、甚六への感謝の気持ちや豊作の願いをこめて、穴口の近くの鹿妻神社でお祭りを行っています。

おしまい